

氏名	津多 成輔		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 10599 号		
学位授与年月	令和 5 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	大学が少ない地域の生徒の進路意識に対する中学校・高等学校の教師の寄与		
主査	筑波大学教授	医学博士	斎藤 環
副査	筑波大学助教	博士（障害科学）	河野 禎之
副査	筑波大学助教	博士（体育科学）	門間 貴史
副査	早稲田大学教授	博士（文学）	岡本 智周

論文の内容の要旨

津多成輔氏の学位論文は、大学が少ない地域の生徒の進路意識に対する中学校と高等学校の教師の寄与について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

目的：著者は大学が少ない地域の多くで、身近な大卒者が少なく大学の情報を保持する関係的資源が少ない状況があり、教師が生徒にとって大学に関する情動的資源の一つであると仮定している。このため著者は、大学が少ない地域である和歌山県を対象として、生徒の進路の選択肢を制約／拡張する存在として教師に着目し、進路に関する情報がいかに教師から示され、生徒に解釈され受け取られることによって、生徒の進路の選択肢がどのように制約／拡張されるのかを明らかにすることを目的としている。

対象と方法：著者は和歌山県を調査対象地として4つの調査を行っている。①高校生を対象とした質問紙調査【対象：公立進学校3校に在籍する3年生（配布部数：569／有効回答者数：478／有効回答率：84.0%）】、②中学生を対象とした質問紙調査【対象：公立中学校8校に在籍する3年生（配布部数：590／有効回答者数：550／有効回答率：93.2%）】、③中学生を対象としたインタビュー調査【対象：②の調査対象校であるF中学校、G中学校から計6名】、④教師を対象としたインタビュー調査【対象：主として①～③の調査の調査対象校となった学校に勤務する教師20名（中学校8名、高校12名）】である。和歌山県を調査対象地とした理由は、地域内の大卒人口も小さく、大学が3校である状況が長らく続いており、大卒者や大学生と生徒の接触機会が少なく、大学の情動的資源は限られ、教師の情動的資源としての比重が大きくなると考えられるため、としている。中学生に対する質問紙調査の内容は、主に基本属性・生活状況、価値観、教師や教師の指導、進路意識に関する内容で、教師へのインタビューは、教師の指導の意図やその論理、背景にある教師の意識や経験を探索する内容、としている。

結果：著者は和歌山県の中学生が、高等教育のことをよく知らず、また、自分たちが「高等教育のことをよく知らないということ」も認知していない、ことを示している。このなかで、学業成績を第一の高校選択基準として偏差値によって階層化された高校を選択しており、進学校に進学した高校生は、高校3年生になると、ほとんどの生徒が国公立大学を第一希望とするとしている。この背景には、生徒、保護者、教師に共通して「学びたいことが学べること」、「国立・公立であること」が「良い」高等教育機関の要素として認識されていることがあり、特に成績上位者においては偏差値や国公立志向が強くなり、学業成績に基づくメリトクラシーを前提とした選抜を肯定し、その結果に基づく大学教育の序列

化も肯定している状況が確認された、としている。

著者は、中学校にとって情報源となる教師の存在は4年制大学の進路情報の主観的認知に正の影響があり、大学生との接触機会が少ない者にとってそのような教師の存在は高校卒業後に進学を希望することに繋がっていたが、一方これ以外の項目では、ほとんど影響がみられていないとしている。また、教師は前述の偏差値に傾倒した選択基準を必ずしも望ましいものではないと考えているが、それでもなお、このような進路意識に基づく進路選択が教師に容認されるのには、「本人の希望」を重視する意識と教師自身の偏差値への信頼があったため、と報告している。

高校生にとって情報源となる教師の存在は、進学によって受ける教育に目的を見出し、入試に関する項目について重要視すること、学業成績に応じた進路の振り分けを受容することに繋がるという結果であること、他方、保護者が非大卒者である場合についても情報源となる教師の存在は進路意識に有意に影響を及ぼすことから、著者は、身近なコミュニティに大卒者の少ない生徒にとって、大卒者としての教師の存在は重要な情報的資源であることを明らかにしている。

著者は、進路指導を行う教師の論理として、高校では偏差値や学力の向上を目的とした指導が重視されており、この背景に、教師が生徒の高校卒業後の学びをはじめとする環境をより良いものにすることに繋がると認識していること、同地域の進路意識を醸成する資源の乏しさから大学進学以降に「ほんとの進路選択」があると考えていることが指摘している。この偏差値や学力の向上を目的とした勉強は、生徒にとって「しなければならないもの」であるが、大学進学に伴い同地域を離れることによって、その意義が転換されると教師は考えているという。著者は、この認識の背景には同地域出身の教師が自らの大学進学に伴って「今まで育ってきた地域とは別の地域で、また全然違う人達と生活」した結果として、同地域の生徒や保護者といった「内」にはない視点を有していること、つまり「大学が少ない地域への教師のUターン就職」によってもたらされた経験の要素が観取できた、とまとめている。

考察：著者は、中学生にとって教師は、多くの場合で高等教育に関する情報的資源ではない一方で、学業成績に基づいた自己選抜の強化という形で、高等教育機会を特定のカテゴリに対して制約／拡張する存在として機能しているとする。

また著者は、高校生にとっては情報源となる教師の存在は重要な情報的資源であることには間違いはないが、結果的にそれらは保護者の学歴を除いて、有利なカテゴリを現行の入試制度、つまり学業成績に基づいたメリトクラシーを受容させ、そのもとでより有利な立場に適合させていく作用があるとしている。それゆえ著者は、高校の教師は基本的には学業成績に基づいたメリトクラシーへの参入を促すという意味で生徒の進路の選択肢を拡張するものであったと述べている。

以上の議論を踏まえて著者は、教師はメリトクラティックな意識を強化するノンメリトクラティックな関係的資源であることを指摘している。これをメタ的に見ることで、教師自身が同地域出身者としてその構造の中で学業成績を基準としたメリトクラシーに依拠した選抜意識を醸成してきたと言え、このことを踏まえると、特定の地域に大学がないことは当該地域におけるメリトクラシーに依拠した選抜意識を再生産することに寄与する側面がある、と著者は結論づけている。

結論：著者によれば、教師は生徒にとって高等教育の重要な情報的資源であり、特に保護者が非大卒者である場合は大卒者との関係的資源を補完するものであるという。その一方で著者は、教師の指導は学業成績に基づいたメリトクラシーを生徒の進路意識に根づかせているとしている。このことは、一部の子どもたちにとっては、大学教育機会を拡張することになるが、大学について知らない、つまり進路の選択肢に大学教育という選択肢がない子どもたちに対して大学教育を受けないことを正当化することにもなる、と著者は指摘している。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、大学が少ない地域として和歌山県を事例的にとりあげ、生徒の進路選択を制約／拡張する存在としての教師に着目し、教師によって生徒の進路の選択肢がどのように制約／拡張されるのかを明らかにしようとしたものである。中学生と高校生への質問紙調査、中学生と高校教師へのインタビューを実施し、詳細な検討を行った結果、大学が少ない地域の高校生にとって教師は重要な情報源である一方、同時に学業成績に基づいたメリトクラシーを強化し、さらにその選抜意識を醸成し再生産している存在であることが明らかにされた。社会における共生が叫ばれ、教育の役割が一層重視されるなか、本研究は、大学が少ない地域における生徒の進路選択において教師がメリトクラシー形成を醸成する役割

を担っている可能性が明らかにされた点において、本論文は教育問題に一石を投じたと言えるであろう。

令和4年10月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。